

泰山の古代遺跡探訪記

神奈川の古代遺跡シリーズ 002

高麗山・白岩神社探訪記

白岩は徐福を招いたのか！

16-June-2010

Gainendesign Labo. Taizan

Copyright© by Taizan 2010 all rights reserved

586 Takakura Fujisawa-shi Kanagawa-ken Japan 252-0802

Tel/Fax 0466-43-4713 Email taizan@gainendesign.com HP <http://www.gainendesign.com/>

神奈川県在住歴50年の小生にとって湘南の海は昔から“遊び場”である。湘南と言っても昭和30年代は葉山・逗子辺りから鵠沼海岸までを指していた。いまでこそ茅ヶ崎海岸がサザンで有名になり馬入川（ばにゅうがわ；地元では相模川をそう呼ぶ）辺りまでを湘南海岸というようなのだが…。辻堂以西がいまだ昔の風景を保っていた当時から大磯海岸は湘南には入らずとも、別格の風情を醸し出していた。そのひとつが吉田茂邸の存在で、近年消失の憂き目にあってしまったが、国道1号線沿いのその佇まいは庶民のあこがれの的だった。もうひとつが大磯ロングビーチでこれは大磯プリンスホテルに付帯した巨大なプールなのだが、往時飛ぶ鳥落とす勢いのプリンスホテルのブランド力と斬新な欧米風のリゾートシーンが若者の心を大いにくすぐったものである。大磯ロングビーチのすぐ真下には国道134号線から延びる西湘バイパスの華やかなラインが箱根方面へと走っている。そしてその直下には大磯の名にふさわしい荒々しい海岸線が横たわっている。

西湘バイパスが開通した当初はたしか1通過で50円ほどであった。昭和40年代にクルマを乗るようになってからはこの西湘バイパスを抜け、まだ料金が比較的安かった箱根ターンパイクを一気に大観山まで駆け上がるのが当時のドライブ&デートコースだった。

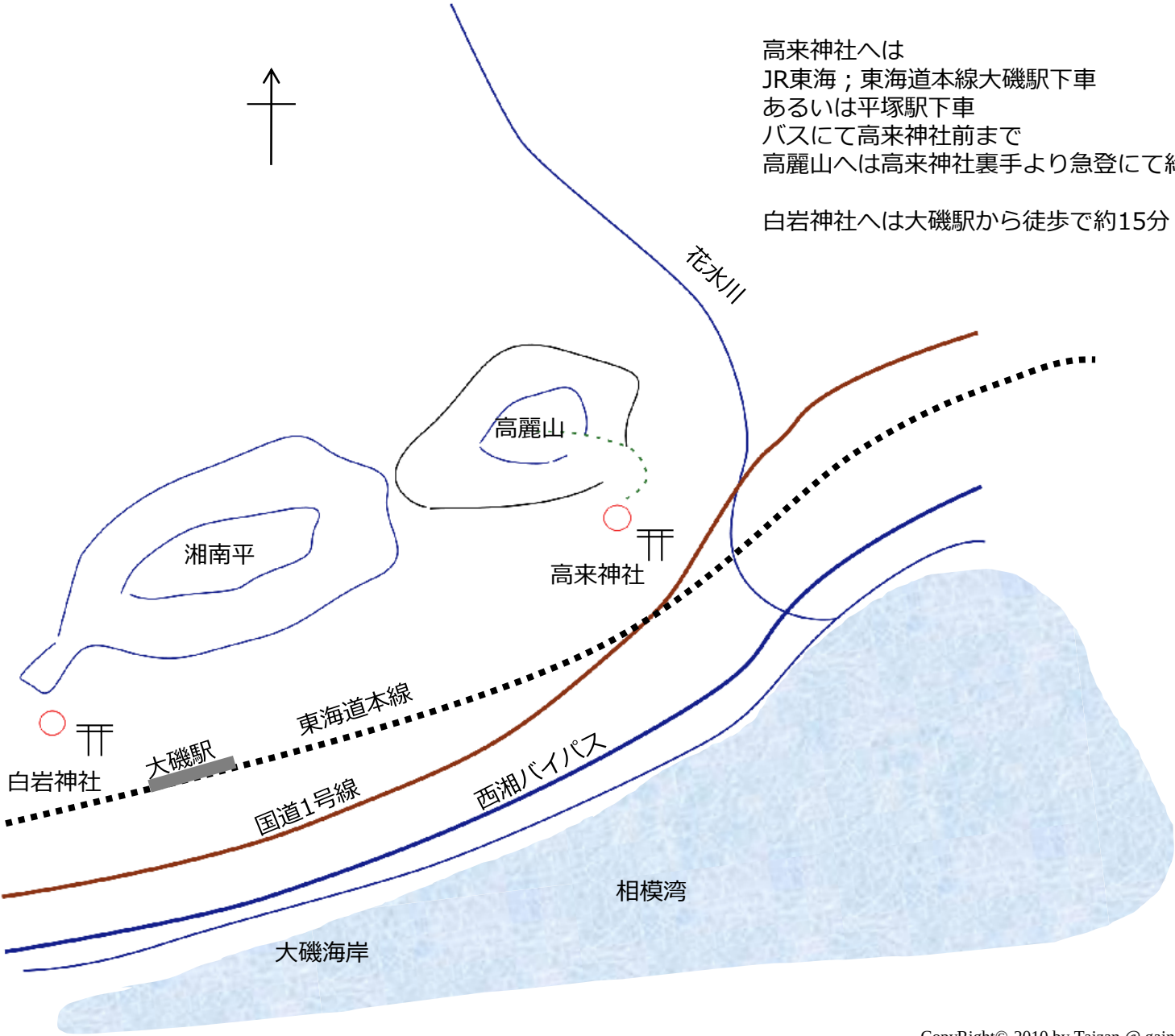
近年バイパスや有料道路の値段がえらく上がったので、藤沢から箱根に行くのに若干混みがちの国道1号線を西進し、小田原経由でそのまま箱根旧道を上がるようにしている。慢性的な混雑状態を除けば、この国道1号線もなかなかしゃれた道で、特に平塚付近から大磯を抜ける辺りまで、江戸時代の東海道五十三次の名残があり、美しい松並木が心を和ませてくれる。

馬入川を越えて平塚市内に入り、花水川にさしかかると前方にぽっこと可愛らしい小山が現れる。それが安藤広重が浮世絵にも描いた高麗山（こまやま）である。高麗山本体がピラミッド山であるかどうかは現時点では判断が難しいところだが、とにかくその存在感は偉大で、近隣の多くの場所からその麗姿を見ることができる。高麗山はその名前が示すように朝鮮半島に関係しているようだ。振り返って見ると、この山には中学生時代にハイキングで大磯駅から登り、高麗山山頂を抜けて西方の湘南平まで行き、そこから大磯海岸まで歩いたことがある。

この気になる山容の高麗山には是非もういちど登ってみたいと思っていた。それに麓の高来神社（たかくじんじゃ）も訪ねたいと考えていた。そんな折、平塚在住の巨石愛好者である知人のT君から興味深い話を聞いた。それは大磯に「白岩（しらいわ）」という巨石があるらしいのだが行き方がどうしても分からないので教えて欲しいという内容であった。“地元情報に比較的無頓着”であった私は実は「大磯の白岩」をそのときまで知らなかった。そこで「大磯の白岩」を調べてゆくといろいろと興味深い話が絡んでいて、なかなか奥が深そうなことが分かった。そこで以前より企図していた相模六社巡りと相模十三社巡りを兼ねて、高来神社・高麗山探訪と「大磯の白岩」探索に出かけたのである。そして後になって分かることなのだが、実は「大磯の白岩」がこの地域のピラミッド構造体の重要な拠点となっていたのである。とりあえず、ここでは高麗山と「大磯の白岩」について探訪記を記してみたい。







高来神社へは
JR東海；東海道本線大磯駅下車
あるいは平塚駅下車
バスにて高来神社前まで
高麗山へは高来神社裏手より急登にて約30分

白岩神社へは大磯駅から徒歩で約15分

安藤広重画；東海道53次平塚
左から高麗山、富士山、丹沢・大山山系



桜の季節の高麗山；平塚市花水川より撮影





以下が高来神社縁起に関する案内板の全文である。前田茂氏による

高来神社（高麗寺）の由来

当山の縁起は古く明らかではないが、神武天皇の御代の開闢と伝えられています。垂仁天皇の御代に神皇産霊尊と瓊々杵尊を祭神とし、安閑天皇の御代に応神天皇と神功皇后が合祀されたとあります。

神功皇后が三韓を征伐したときに神霊が御出現して勝利に導きました。因って武内宿禰は奏して東夷静謐のために、神皇産霊尊（高麗大神和光）を当山の韓館の御宮に遷し奉りました。これが高麗権現社の起源であります。高来神社奉納木遺に、応神天皇の御代に邪険な母国を逃れた権現様が唐船（権現、明神丸）で大磯に渡来されて、この地を開発されました。（これは続日本記の霊亀2年に武蔵国高麗郡の開闢に郡令として向かわれた若光がモチーフと考えられます。）又、大磯の浦（照ヶ崎）で漁をしていた蛸井之丞の小舟に小蛸が上がって来たかとみると舳先に千手観音が御立ちになりました。舟の者共伏し拝み、高麗山にお遷し致しました。夏の大祭には蛸井之丞の子孫が宮神輿の先供として権現、明神丸の船屋台が前後に従い照ヶ崎の祭場に御渡されます。（近年舟屋台は隔年の出御です。）

養老元年に行基僧正が巡国の折に山頂にお祀りしてある千手観音を高麗権現の本地仏とお定めになりました。これより神仏習合の地として山頂の高麗権現と下宮の千手観音とを併せ祀り、高麗寺別当の司る所となりました。斎衡年間に円仁により本社の左峰に毘沙門塔を右峰に白山社を建立されました。鎌倉時代には幕府の尊崇厚く後白河法皇の仏事に興り、政子の平産祈に神馬を奉りました。建長7年に定禅坊が牛王刻印を献上し、弘安11年に鐘が鑄造されました。僧坊は24を数え高麗寺の最盛期で神像群もこの頃に造られました。室町時代には足利氏の内乱で高麗山が攻防の場となり、戦国には北条小田原城を上杉、武田勢が攻め果たさず、引き上げの途中に高麗寺も戦火に遭い白山社と毘沙門塔を消失しています。

天正19年に徳川の時代となり家康より寺領百国と山林を賜り、後、東照権現が併せ祀られた地頭の治める所となりました。春の大祭は家康の命日、4月17日に因み行われ山神輿の登御、町内の植木市で賑わいます。

明治になり神仏分離され寺物は地蔵堂に移され、高麗神社と改称され、明治30年に高来神社に改称されました。

平成18年1月吉日 前山茂 読み記す



高来神社の伝承

高来と書いて「たかく」と読ませるそうだ。高麗山（こまやま）山頂に今は廃れている山宮があり、現在の地にある下宮と合わせて高麗権現社あるいは高麗三社権現と本来は称されていた。神功皇后が三韓征伐後、朝鮮半島から百済明神・新羅明神・高麗大神を招来し、その中の高麗大神を大磯の地に勧請したといわれている。この場合の高麗とは高句麗（こうくり）のことで、こうらい、こまともいう。大磯町高麗にある。

高麗＝こうらい→高来→たかく という流れであると考えられるが、発音がここまで違ってくると本来の意味が失われるのではないかと妙な心配もしてしまう。

また『新編相模風土記』によると、この地の周辺に朝鮮半島から渡ってきた人たちが古来より定着したとあり、明治時代初期には高麗村と称し、現在は平塚市大磯町高麗が所在地となっている。

個人的には高麗山（こまやま）、高麗神社（こまじんじゃ）の方が響きが良いので好きなのだが…

全国には“高麗”と称される地名がいくつかある。近場では埼玉県の高麗村（こまむら）がある。ここはもとは高麗郡でもあったように、規模は大きいのである。

前出の「高来神社の由来」にある“若光”とは古代朝鮮半島から日本に渡来し、武蔵国高麗郡一帯を開発された高麗王若光（こまのこきしじゃっこ）を指しており、この方は古代朝鮮の高句麗から来られた首長である。

霊亀2年(716)、関東を中心に散在していた高句麗人を武蔵国高麗郡に集め統治したとある。大陸の文化や朝鮮半島の先進文化を取り入れながら国土の開発に尽力され、帰国することなくこの地に没したそうだ。その遺徳を偲んで、高麗明神として祀ったということである。

埼玉県日高市にある高麗神社には「社神麗_句高」（右から）と明記され、出自も朝鮮人とはっきりと書かれている。大磯の高来神社のルーツである高麗権現も同一人物が祀られている。要するに…大磯高麗山下宮の社殿は“高麗神社”なのだ。やっぱり「タ・カ・ク」という呼び名には無理があるのではなからうか。

由来書きには興味深いことが記されている。それは『邪険な母国を逃れた…』というところだ。高麗王若光は高麗郡の開発と統治のために来られたとあるが、その実態は母国からの逃避だったのではあるまいか。同じような文脈が実は徐福にもあり、始皇帝の命を受けて徐福は日本探索に来たことになってはいるが、その実態は始皇帝の圧政から逃れるために日本に向けて大規模に移民を敢行したという説だ。

高麗王若光が大磯照ヶ崎から上陸したことは歴史的事実であろうから、大磯が渡来人の受け入れ口であったことは確かであろう。徐福と高麗王若光とは歴史的に900年以上の差があるわけだが、渡来の図式としては同様のものが十分に考えられる。



さて、話は大いに飛んで、徐福関連のことに若干ふれておきたい。徐福実在論云々を議論する向きもあるようだが、ここでは徐福実在説に立ちながら、徐福団一行の日本列島浸透ルートについてその片鱗についてのみ記述する。徐福論は、それはそれで巨石文化の伝搬者という側面もあって、興味深いし奥も深くボリュームも大である。徐福と巨石の関連についてはいずれは触れなければならない重要なテーマではあるが、ここではそのほんの一部についてのみ言及してみたい。

神奈川県在住のものであれば相模湾、大磯・平塚、大山、秦野市…といえはそのイメージがすぐさま思い浮かぶわけだが、これらが実は徐福繋りのフレームワークで語ることができる。結論を急げば、徐福船団一行（たぶんその一部か）が、紀元前2世紀頃に、相模湾に到着し、なんと大磯海岸から上陸後、年月を経て神奈川県の中央部、丹沢・大山山系の麓にある現在の秦野市に定着したという説がある。また、ピラミッド型を呈する流麗な大山には大山阿夫利神社があるが、その御祭神である大山祇神が実は徐福ではないかという説もある。言うまでもなく秦野市の秦は徐福関係者を意味している。そして私が住んでいる藤沢市の妙善寺には徐福一行の系譜である福岡家の碑があり、そこには福岡家が徐福の子孫である旨が刻まれていることも分かっている。

また、相模六社があり、それは一宮、二宮、三宮、四宮と八幡宮、総社なのだがその中の三宮；比々多神社は秦氏から影響を大いに受けた神社であって、周辺にはスーンサークル、土器類などが見つかっている。比々多神社は秦野市と伊勢原市の中間にあって、大山山系の麓に所在するまことに風光明媚な良き場所にある。これは現地に行って実感することだが、やや高台となっているなだらかな丘陵地帯から見渡せる神奈川南部の平野は実に豊かで美しく、その向こうに光る相模湾の海は心なごませるものがある。日本列島における徐福船団の上陸地点とされる場所は数多くあるが、大磯からの上陸説と秦野への定着説も実感として、さもなりなんと頷けるものがある。つまりこの地ならば国を作ってもよし…という印象がするのである。

相模湾の海岸線は意外に長く、海水浴で有名な逗子海岸、由比ヶ浜、鵠沼海岸もあるが辻堂以西の海岸は海水浴には不向きな荒磯で、水深も波打ち際から急に深くなる。だから馬入川（相模川）や花水川の河口付近ならばかなり近くまで大きな船でも近づくことができると思う。

さて、本題はここからなのだが、実際に相模湾に進入した船団（たぶん複数）が見たものは何かということなのである。真南から北上すると左に当然富士山の麗姿が見えるだろう。ほぼ真正面に大山が見え、その麓に鷹取山、浅間山、弘法山などの低山が見え、海岸線間近にクジラの根姿のような山塊が見えたはずだ。この山塊が高麗山から湘南平に続いている。その山塊の東端にお椀を伏せた形の高麗山が見えることになる。古代であれば陸上の特徴ある山が信頼のおける目印になったことだろう。上陸はたった一度ということはなかろうから、上陸地点の目印としては高麗山の伏せたお椀型は最適であると言えないだろうか。まえがきがかかなり長くなってしまったが、上記のような視点で今回の探訪記をご覧くださいと高麗山の位置づけや白岩神社の意義が俯瞰的に見えてくると思う。





高来神社の鳥居、後方は東天照という小山





高来神社参道にある古樹



高来神社社殿







向かって左側が男坂



高来神社裏手の高麗山登山路



向かって右側が女坂





高麗山山頂付近から大磯海岸を望む

山頂間近の急階段

山頂にある石積み





壊れた歌碑



高麗山登山路中の道祖神



杉本稻荷社





高麗山山中の樹木



険しい男坂





桜で彩られた高来神社境内；左の山が高麗山、右の山が東天照



白岩神社の伝承

高来神社の西方に白岩神社という小じんまりした神社がある。歩くと小一時間はかかるだろうか。距離にして約3Kmほどである。この白岩神社は読んで字のごとく「白い岩」に関係している。

1756年に地元の波田野庄左衛門という人物が記した白岩神社縁起の中に、非常に気になる一文がある。それが次のくだりだ。
『海の方から眺めると白く輝いて見えたので「白岩山」と呼ばれていた山の麓にその社は建てられ、白岩神社と呼ばれるようになった。』という。
つまり海上から北に位置するこの神社の方向を見ると、山が白く輝いていた。その山を白岩山と呼んだ…のである。

高麗山の項で述べたように海上から見える特徴ある形態の山は目印になる。同様に海上から見える特徴ある色や光も目印になる。白岩神社のある白岩山は後者に当たる。

前出の知人のT君の話では山の上に“白岩”と呼ばれる巨石があるとのことだった。まさかこんな身近にそんな面白い巨石があるなど、想像もしていなかった。…という顛末で、とりあえず単独に存在しているであろう、その白い岩を探しに行った。

大磯の町は知る人ぞ知る古き高級住宅地で、東海道本線の北側にはびっしりと住宅が立ち並んでいる。白岩神社自体はその入り組んだ中にあるためなかなか探しにくい。それに街並みが結構旧いので、道幅が狭く往生する。今回の探訪もいつものように愛車のマスタングで行ったので、この道路の狭さには閉口した。

次々ページに行き方の図を載せておいたので参考にさせていただきたい。ただし、やはり大磯駅から徒歩で行かれるのがよいと思う。

何度か通り過ぎてしまった神社の入り口にようやくたどり着き、車幅ぎりぎりの鳥居の横を抜けて白岩神社の境内に入る。この参道が住民生活道路にもなっているので、白岩神社真下までクルマを入れなければならない。この辺りは外来者が少ないようで、“怪しげな闖入者”である私に、地元の地区役員のような紳士が懇懇に探りを入れてきた。

白岩神社は小さな社、狭い境内ではあるが地元ではかなり重視されているらしく「歩射；ぶしゃ」と呼ばれる祭りがかなり大規模かつ有名である。

白岩神社の由来については次ページ参照ください。



白岩神社のあらまし

祭神

伊弉諾尊 イザナギノミコト (注1)
 伊弉冉尊 イザナミノミコト (注2)
 若宇加能売命 ワカウカノメノミコト

昭和四十年代に『十二所権現縁起』と題する古文書が見
 つかり、若宇加能売命を勧請したことが記されている。
 (注1) (注2) は皇国地誌による。

神徳

五穀豊穰 交通安全 開運長寿

『当社は武運を守りかつ五穀を司取り給う御神なりとて
 (右大将頼朝公は) 梶原景時を御名代として (当社に)
 幣帛を納めさせ給う』と縁起にある。

社格

西小磯の鎮守

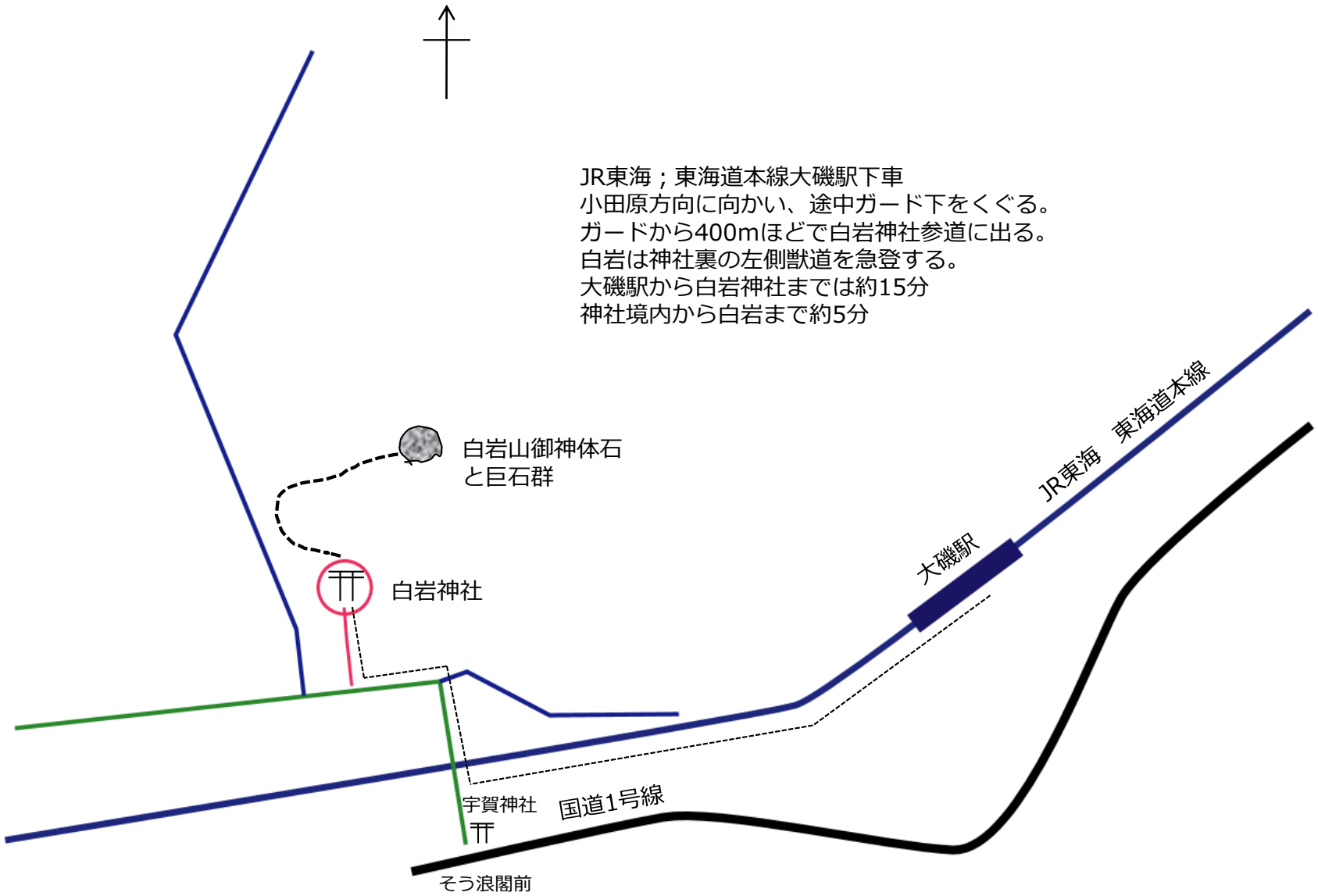
由緒

遙か昔、西小磯に一人の童が現われて、跳びはねるよう
 な仕草をしながら『我は大和の広瀬の神なり この地を
 鎮守する 崇め奉れ』と言って地面にひれ伏した。
 人々は言われた通り、大和の国にある広瀬神社の御祭神
 『若宇加能売命』を勧請し、この地に社を建ててお祀り
 した。

後の山が、海の方から眺めると白く光って見え白岩山と
 呼んでいたので、白岩神社と称えた。その後白岩権現社
 と称えたが、付近を通る人が落馬したり災難が降りかか
 るため現在の場所に社を移し、社名も十二所権現社と改
 めた。以来災難は無くなった。

明治の神仏分離政策により、ふたたび白岩神社と称する
 ようになった。





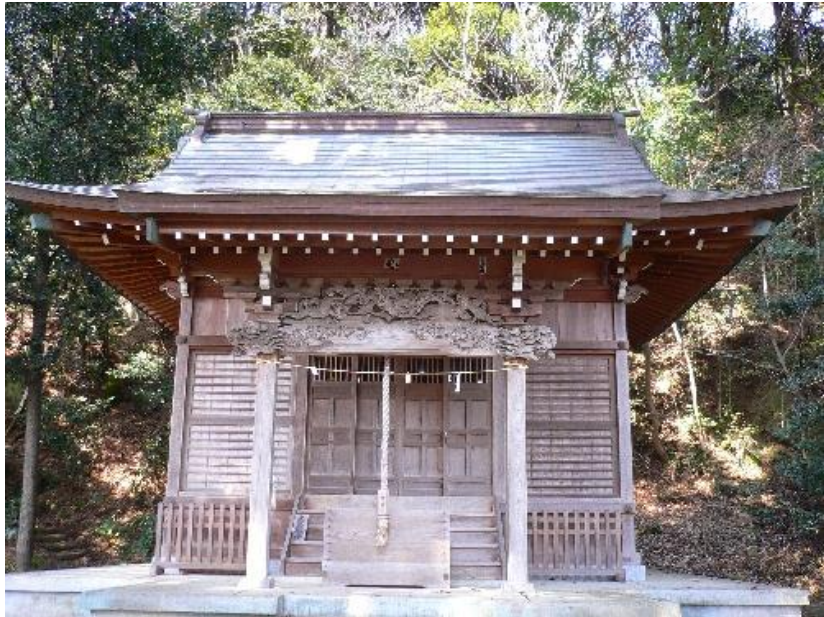


白岩神社の鳥居と参道；左脇からクルマで入れる。



最奥部にある階段を上れば白岩神社





白石神社の社殿
社殿の裏手が高さ50mほどの白岩山



←境内向かって左奥の藪の中を進む

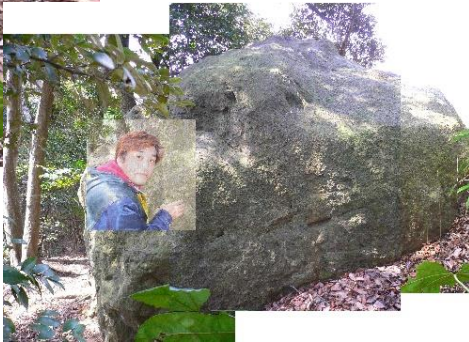


←白岩神社社殿の左脇にある小さな祠
後ろにはすでに巨石群が顔を覗かせている。

↑藪を10mほど抜けると獣道のような登坂路が出てくる。



サイズ比較



白岩神社裏手の50mほどの小山（おそらく白岩山）の頂上付近にこの巨大で特異な形状の御神体石が鎮座する。上の写真はほぼ真南からの撮影。サイズ比較で分かるようにかなり大きい。





東側からの撮影。山頂に存在することが分かると思う。
前ページと同じ御神体石。





御神体石の西側には“人頭”状の切り欠きがある。



山の裏手は造成のため破壊が進み、住宅が迫ってきている。





曾我五郎が踏みつけた足跡！？とも言われる足型の凹穴部。



←右と同じだが逆方向。サイズ比較。





御神体石の上面部には別の凹穴部もある。青い点は最近打ち込まれた跡。



御神体石の上から南方向に社殿が存在する。





御神体石で最も特徴的な西側の“人頭”形状部。
右の写真は最下部で明らかに彫刻痕跡がある。





御神体石近くにある別の巨石。南に面し、社殿の真上辺りにある。



白岩山山中の巨石群。



御神体石近くにあるエネルギー放射を感じる樹木。





御神体石の部分拡大写真のひとつ。

御神体石の岩質は明らかに礫を含む堆積岩。

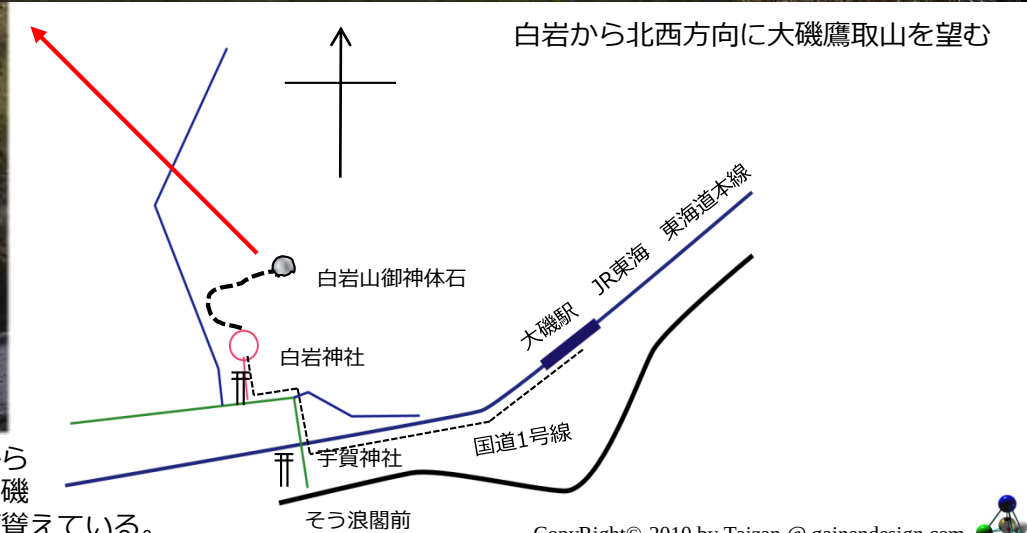




左上は山の裏手で、途中で開発が止まっているところ。
右上はさらにその向こう側で、道路がある。つまり白岩山の裏手が住宅開発地とされ造成されつつあるということ。返す返すもこの破壊には呆然としてしまう。
天の啓示だろうか…御神体石の寸前で岩盤切削が止まっている。

白岩山は左写真のように全山岩盤状の山で、その山全体が白く光っていたところから白岩の地名が起ったとされる。





大磯鷹取山 最も感動した情景がこれだ！ なんと白岩山頂上の御神体石の所から景色が一気に開け、遙かなあたに聖山らしき山が見えるではないか。直感的に大磯鷹取山であると認識した。後で調べたらその通りで、約4 km先に大磯鷹取山が聳えている。

地元神奈川のことが気になりだしてすぐに始めたのが相模六社と相模十三社巡りだった。もう1年半前にもなる。その途中、T君からの偶然のメールもあって、途中組み込んだのが高麗山探訪と白岩神社探索だった。相模十三社巡りを無事終えて、その間もうひとつ気にかかっていた大磯鷹取山探索も終了した時点で、今回の探訪記をしたためることになった次第である。時間も結構掛った。回った範囲もかなり広いものになった。また、そこに含まれていた物語や関わりなども濃密なものであり、知的で創造的なフィールドワークとなった。

振り返ってみればいくつものトピックスはあるのだが…その中でも最大のものは、白岩山の御神体石と大磯鷹取山の深い関係性を発見できたことだろうか。それに今回の探訪には始終、“徐福”というキーワードが絡んできたことも忘れられない。おかげで、徐福関連の情報も改めて入手・整理でき、しかも富士古代文明と徐福との関連や大山阿夫利神社、寒川神社といった極めて身近で、私の生活に密着した対象とのつながりなども見えて来て、なんとも実に楽しい探究活動になった。

大磯の白岩山は高麗山、湘南平から一続きになった山塊で、というよりも小山群で、白岩山本体は小山群の西端にある。白岩山の岩質を直接見たが、それは明らかに礫を多く含む堆積岩であり、御神体石も岩盤も同質の岩である。御神体石など表面を風雨に晒されている巨石群は黒みがかった色をしているし、中には若干の苔をつけているものもあって緑色をしているが、御神体石の一部や山の裏手、造成切削された生の岩を見ると、灰色がかった白味を帯びた色彩をしていることが分かる。

古文書に記された、「海上から見える全山白い岩の山…から白岩とその地を名付けた」という趣旨のくだりは、おそらくはこの白岩山がいまだ樹木が繁茂せず岩盤そのものが見えていたことを想像するに、50mほどの小山ではあっても相模湾を航行する船からは十二分にその存在を確認できたことだろう。

紀元前の徐福の時代であっても、8世紀の若光の時代であっても、海から見える白岩山の「白き輝き」はあったにちがいない。そしてその山の山頂にはいまだに有り難くも御神体石が存在し、聖なる山大磯鷹取山との関係性も見事に保持しているのである。

いまおぼろげながらではあるがイメージしていることは、大磯の高麗山や白岩神社が単独でただそこにあるのではなく、非常に大きな図式の中のある表象として存在しているのではないかということである。

そういう意味では今回のフィールドワークで最高の感動は白岩の御神体石確認もさることながら、御神体石から大磯鷹取山を確認できたことなのである。大磯鷹取山については、別の機会に詳しい探訪記を記したいと思う。

2010年6月 古代遺跡探究家 泰山

